

かわいそうに。

ある秋の日の午後、シーソーに腰かけながらたくさん散った銀杏の葉っぱを集めて、それをつないで首飾りのようなものを作った。

「あのお空からあのお空まで」

いちちょうのはっぱつづけたら、どこまでいくの。

いちちょうのはっぱつづけてみよう。

ずつとずつとつづけたら、

きつとみんながびっくりするよ。

あのお空からあのお空まで、

いちちょうのはっぱつづけよう。

楽しい一日の保育を終えて、子どもたちは帰途につく。帰る道にも子どもたちは多くの疑問を見出し、驚きの眼をみはるのである。

「白いくもさん」

のぶ子ちゃんの方の

あのお空、

ものすごいきれいやわ。

ほれ、綿みたいくも、

ほれ、みとおみ。

ほんまにあのおうたとおんなじや。

追いかけてこしてるみたい。

あれ、犬さんみたいなくもよ。

あのかもさん、

どこへいくの。

三才児の粘土遊びから

馬淵治子

今年の三年保育児が粘土にふれたのは入園してまもなくだった。みんなが自分のものとして自由にふれることが出来るように、それを各自の小箱に入れて与えた。こぶし大の油粘土をみいだした子どもは、は

経験ということは、事物の世界のことに限らない。神と人との関係、人と人との関係、人と物との関係から生ずるさまざまなことを、それからそれへと経験によって学ばねばならない。民主主義社会を担って立つ子どもたちの最も必要なことの芽生えを正しい方向にむけておかなければならないと思う。
(京都・復活幼稚園)

じめてみるものに驚きの目をみはりながらもそろそろとさわっていたり、または「使ったことがある」という、ゆとりのある様子で、うれしそうにとびついていった。中にはほとんど一月あまりもロッカーの中に

寂しく放っておかれた粘土もあつた。その持主は、戸外遊びの楽しさに頬をかがやかせている運動量の多い男の子や、また新しい環境になれることがむずかしく、どんな遊びにも応じないで自分のざぶとんにべったり坐ったままの子どもであつた。そのよな子どもも、ときどき自分のロッカーを開いては「ここにある」と粘土の存在を確かめる動作をくりかえしているうちに、興味をもち始めるようになっていった。

この年令の製作は、皆が黙々として大きな塊を小さなものにちぎるといふことから始まって、丸めたり細長くのばす運動が表れる。

ある時、元気のよい女兒が「先生、リング」と見せに來たのをきっかけに、出來たものを先生に見せるといふ氣持が出來て、つぎつぎといろいろなものを持ってくるようになった。手でギュッと握っているうちに出來た波模様のものを「これ、ごちそうよ」とそつと掌を開いてみせるもの

や「先生これ」と言つて差し出し、うっかりごちそうになつたものが蛇であつたりして、驚く先生の姿に「きゃっ、きゃっ」と喜ぶようになると、何となく子どもたちの表情もなごやかに、うちとけたものが表れてほつとする。

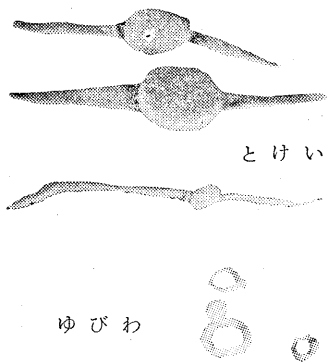
入園当初は、きまつて先生の腰のあたりにつかまつて離れない子どもたちの姿がみられるが、ぞろぞろとその子どもたちと一しよに、粘土をしている子どもたちの所を訪問する。出來たごちそうや首飾りは、あくまで自分と先生だけのものであつて、一しよにいる他の子どもたちは全く無視されて遊びの外におかれている。

最も生活年令の低いある女の子が「これ、ごんごよ」と何度もいつてみせたちぎちぎのものは了解に苦しんだが、のちにお母様よりごはんのことだと説明をいたゞき、他にもこの子どもの専用語がいろいろあることをうかがつた。

五月の雨の日、ふと、ひとりの子どもが

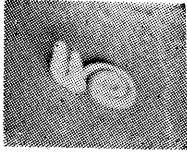
自分の粘土箱（およそ十種立方のもの）を両手で持ち、粘土の上からお餅つきを始めた。お餅に似た柔らかさと、ペタンペタンという心地よいひびきに、長い間楽しんでいううちに、次第に三人、五人と協調してリズムカルなお餅つきが始まつた。その子どもたちの表情は、顔を見合せ、声を出して喜びあい大合唱となつた。このころに、はじめて友だちの意識が生まれてきたように思う。

時の記念日にちなんで年長組が時計を作っているのをみたり、時計屋さんごつこを



した思い出から、腕時計を作りはじめた。「先生の時計！」といって持ってきたものが小さすぎてあわてて「指輪にしよう」というくふうも出て来た。

保育室の飼育瓶にかたつむりが集り、黒板画も、八ツ手に這うでんでん虫にかえられた六月のある日、ふだんから口数の少ない女の子が「これでんでん虫」と、およそそれらしくない、くしゃくしゃのものをみせていた。そばでみていた男の子が「ちがうちがう」といって、早速自分の粘土で実演をはじめ「こうでしょう、でんでん虫は初めにつのを二つ作ってよけておくんだよ。それから細長い蛇を作ってぐるぐる巻いて、あとでくつつけるもんだよ」と得意になって作ってみせた。



なるほど出来ばえとしては立派なものがあったが、この子の作品が、絵にしてもい

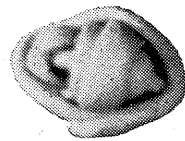
つも梓にはまった同じようなものにとどまっていることや、前の女の子が、無意識のうちにもさまざまな感情をこめて作ったものであるということを知り、個人の発達に応じた指導の大切さをしみじみ味わった。

夏休みも近くなると、偶然に出来上ったものの喜びや、それにくふうが加わった喜びがふえてゆき、おせんべいに爪のあとをつけて「胡麻入り」だといひ、指でつついて穴をあけ「ドーナツ」、二つ重ねたものは「ホットケーキ」だと変化にとんでくる。

さまざまな経験のあと、二学期から、粘土は要るだけたくさん使わせたい、大きいものを作らせたいと思ひ、大きな罐に入れて欲しいだけ用いることにした。今まで外遊びの激しかったある男の子が、一学期に個々に与えられた量の三倍も四倍も使って、二メートルもあるような太い蛇をつくり始めた。からだをのりだし、うんうんと言つて、両腕を使いこねる力強さは、小さな粘土板など目もくれずに、広いテーブル

いっぱいのにびていった。

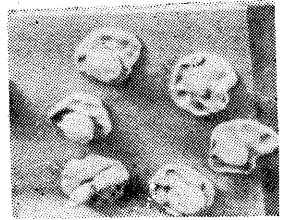
人工衛星



一学期頃にたくさん出来た蛇は、その応用変形として、バナナや、渦をまいた蚊取線香などになり、糸玉のように巻いて出来あがったものに、人工衛星と名づけた現代版も生まれるようになった。

園生活にもなれ、お友だちと遊ぶ楽しさを味わう九、十月頃になると、粘土遊びのうち会話に加わってくる。部屋の一隅にあるおままごと粘土が出張するのもこのころで、自由に操作出来るごちそうは、まわらぬ口で「あじもの」とが入っています。「胡椒を入れておいしくしましょう」などと話し合つて、母親ぶりを發揮している。粘土で作った果物やおだんごが、ままごと道具と結びついてごっこ遊びに発展し、これが友だち遊びへさそい入れるよい機会と

ごちそう



なった。

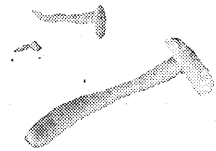
秋の遠足で行った自然動物園の思い出から、兎、あひる、ライオンを作るといったり、立体的な迫力をもつ船、自動車などを意識的につくり出す創造力のたくましい子どももみられるようになった。

また、このころになると、粘土を他の材料と一しょに用いるおもしろさを知るようになり、おだんごの串を要求したり、みどりの折り紙をちぎって大根の葉にしたり、棚の上においてあったざくろ、からいつのまにか粒を取って来て、首飾りのガラス玉に似せて美しい連鎖模様を作って楽しんでいく。そのほか「しいたけ」「くぎ」「ふうせ

あひる



かなづちとくぎ



ん」「かなづち」「たび」など、いろいろなものをつぎつぎと表現していく。

このように自分たちで見出した材料が創造に大きな助けとなっていることから、用途のちがった場において材料を粗末に扱うことのないよう指導して、適切な材料はいつもと与えたいと思った。

朝、勢いよく部屋にかけこみ、ドスンとおいたバスケットの下に粘土があり、偶然出来た波の模様に喜んだり、上靴でうっかりふみつぶした粘土に靴の型を見つけるなど、無意識のうちに出来る形のおもしろさを感じとっていることも見逃せない。

以上、入園以来粘土の肌ざわりが気持よ

く扱える季節をとりあげて、自由遊びにおける三才児の粘土遊びをみてきたが、粘土をみつめて手だしをしなかったはじめころの、あの固い表情もほぐれて、誰でも一度は手にふれてきたことは非常に興味深い。まるめたり、ちぎったり、たたいたり、という動作のうちに、自然に何かに見えてくるといふ発見の喜びから、ある子どもは自分独特のものをつくり出そうとする態度に至るまで、その個人差はあっても、その時、その場の瞬間的な感情や思考が、興味によってつくられ、つぎつぎと浮かびあがる新しい考えが、各々の個性に応じた形を生みだしていることを知った。

したがって、出来上った作品の価値に捉われて判断することなく、楽しい遊びの雰囲気の中で、つくることよっていかに成長したか、いかに楽しんでいたか、を認めて、適切な賞賛と、励ましを与えていきたい。(日本女子大学付属豊明幼稚園)